

新来中国人の多様性と共生への道：特別展「多みんぞくニホン」を振り返って

著者	陳 於華
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	64
ページ	175-188
発行年	2006-12-28
URL	http://doi.org/10.15021/00001546

新来中国人の多様性と共生への道 特別展「多みんぞくニホン」を振り返って

陳 於華

1 展示の構想と目標

日本に生活する中国籍の人は約52万人（2005年現在）であり、在日コリアン（約60万人）に次いで、2番目に大きなエスニック・グループとなっているが、その内部構成やそれぞれの生活実態はホスト社会一般にあまり知られていないのが現状である。中国籍の人のうち、5～6万人のオールドカマー（老華僑）を除いて、そのほとんどが1970年代末中国の改革開放以降に来日した新来中国人（新華僑）である。新華僑¹⁾と老華僑は国籍や文化面においては共通点が多いが、来日の時期や背景、日本での暮らしぶりなどが大きく異なるため、基本的に別々に展示することになった。

新華僑は、滞日の歴史はまだ浅いが、年々大幅に増加しており、在日外国人の主要構成員（集団）の一つとなっているため、日本の多民族化の有様に少なからず影響を及ぼす大きな存在である。しかし、一口に新華僑といっても、来日の目的や本国における階層、学歴などはさまざまであり、来日後の展開も異なる。また、老華僑のような中華街など目に見える地域的コミュニティはほとんど形成されていない。新華僑の多くは留学や就職の後、日本の国籍や永住権を取得して定住するようになるが、日本に数年滞在后中国に帰国したり、第三国へ再移民したりする人もおり、漢民族以外の少数民族の人も含め、新華僑はその多様性と流動性によって特色付けられている。ゆえに、展示として、その多様性と流動性をいかにモノ（展示物）で表現するかが最大の課題であった。

幸いに、多様性と流動性の強い新華僑でも、共通点を持ち合わせたいくつかのグループにまとめることができ、これらのグループは新華僑の主要構成を成すと同時に特徴的な存在でもあるということを確認することができた。そして、それぞれのグループの違いは、新華僑の多様性を反映しているだけでなく、まさに日本社会に定着するまでのステージの違いでもあり、通時的に見られる定着のプロセスを示唆するものである。

こうした認識に基づき、展示では、主要構成を成すいくつかのグループを取り上げ、それぞれのグループの人たちの生活や特徴を見せることによって、新華僑の多様性や定着過程を来館者に示すと同時に、彼らの抱えている問題や彼らとの共生を考えるきっかけを与えることを目標とした。具体的には、各グループの人たちの衣食住や勉学・労働の実態、彼らのエスニック組織や地域住民との交流など、新華僑の日常生活やネットワークを構成する各側面を紹介し、来館者の新華僑に対する認識を立体的なものにする

ことを目指した。

2 展示の実現に向けて

2.1 グループの選出

展示の構想に基づいて、まず新華僑の特徴を反映する主な構成グループの選出を行った。先行研究を参考の上、客観的な根拠として、法務省入国管理局で発表されているデータをもとに、各種在留資格の中、高い割合を占め、且つまとまりやすいグループに注目した。その結果、就学生（2003年現在日本の就学生総数の4分の3以上を占める）、留学生（留学生総数の3分の2以上を占める）、研修生（外国人研修生の約7割を占める）、および定住傾向の強い就職者（永住権や就労ビザなどを取得した者）を選出した。具体的には、日本語学校に通学している就学生数名、国公立や私立の大学に在籍する留学生数名、高い割合を占める縫製業の研修生数名、就職者としてのサラリーマンや経営者、および外国人「教授」（在留資格）総数の約3分の1を占める中国人の大学教員を展示対象とした。また、これらのグループには日本人の配偶者や少数民族の人も含まれることを念頭に入れて、具体的な展示対象を特定することにした。

2.2 調査と資料の収集

展示の主な対象（代表的なグループ）を定めた後、代表的な人物や展示資料を特定するために、関係者への聞き取りを行った。そして、大まかな状況を把握した後、特定した対象（当事者）の勉学・労働・生活の現場へ足を運び、話を聞いたり、実態を観察したり、カメラで撮影したりするなど、面接調査を行った。それに基づいて展示資料の一部を作成したが、資料の大半は当事者が使用し、所蔵してきたものである。資料収集に当たり、特に当事者の衣食住や勉学・労働の実態を分かりやすく反映したモノ、写真、書類などに注目した。しかし、中国から持ってきた食品や日常用品などすでに消耗したもの、調理用具や布団など借用すれば生活に支障をきたすようなものは収集できなかった。また、料理や料理に使われる材料などたとえ収集できても実際に展示できないものもあり、収集したい資料がすべて収集できるとは限らない。

3 新華僑の特徴の再発見

筆者自身は新華僑であり、自分の経験・見聞や新華僑に関する先行研究を通して、新華僑の特徴についてかなり認識しているつもりであった。にもかかわらず、フィールドワークの際、予想外のこと、認識が修正されることが多々あった。現場での調査や資料の収集は新華僑の特徴の再発見をもたらしたのである。

3.1 厳しい生活に耐えながら目標に邁進する就学生

日本語学校への就学は新華僑来日の主なルートの一つである。中国人就学生は2003年までは年々増加し続け、就学生総数の4分の3以上を占めている（2003年現在）が、物価の高い日本でどんな生活を送っているのだろうか。日本語学校の教師の紹介を通して、筆者は実際に就学生たちの住むアパートに足を踏み入れることができた。

特別展開催前年の2003年12月下旬のことであった。筆者はわざわざアルバイトをキャンセルしてインタビューを受けてくれる就学生たちの住むアパートを訪れた。1DKに女性3人が同居しているが、就学生としては珍しくないケースである。真冬にもかかわらず、老朽化が進んでいる部屋の中には暖房器具は一切なく、室外の温度とほとんど変わらない。しばらく座っていると、コードを着たままでも、筆者は鼻水や震えが止まらなくなり、出されたお湯に頻りに手を伸ばした。中国の南方からやってきた彼女たちは一体どうやってこの寒さを凌いでいくのだろうと思わずにはいられなかった。だが、そんな中でも、中の一人が勉強ノートを見せながら、今は日本語を一生懸命に勉強して、来年国公立の大学を受験し、将来はアメリカの大学院に入りたいと、夢を熱く語ってくれた。

部屋を見回すと、圧力鍋、食用オイル、粉ミルク、葉、シャンプー、石鹸から衣類や布団まで、生活に必要なものはほとんど中国から持ってきたものであることに気づいた。彼女たちに話を聞くと、節約や安心のために、来日の際、一ヶ月分の食品や日用品は持ってきたという。台所兼食堂の中に、洗濯機は置いてあるものの、もらい物ですでに壊れて使えない。洗濯はすべて手洗いである。真っ暗な和式トイレには明かりがつかない。日本人の普通の生活では考えられないことである。しかし、それも覚悟のうえか、「今困っていることは」と聞くと、「学校の授業以外は日本語を使うことが少ないからなかなか上達しないこと」と勉学上の悩みを打ち明けた。

こうして、インタビューや観察を通して就学生の現実が明らかになった。彼らは不自由な生活を強いられているだけでなく、毎日の勉強とアルバイトによる疲労、一定期間中に大学や専門学校を受からないと中国に帰らなければならないという大きなプレッシャー、日本語の不自由さによる生活空間の制限やそれに伴うもどかしさなどにも耐えていかなければならないのである。就学生の過酷な日常は筆者の推測を遥かに超えたものであった。しかし、そんな中でも、彼らは若さと情熱をもって幾多の困難を乗り越え、それぞれの目標に向かっていっているのである。

3.2 地域社会と関わるようになる留学生

就学生の約半数が大学に進学して留学生になると言われる（朱 2003：107）。それに加えて、中国で日本語を習得した大学生や大卒以上の人々が、日本の大学に編入したり大学院に入学したりしている。2003年現在、中国人留学生は約8万7千人であり、各種

在留資格のうち、最も人数の多いグループとなっている。彼らは就学生と同様に古いアパートに住んでいるが、友人との同居は少なく、一人暮らしや家族との同居が多い。これは、日本語能力が高くなるにつれ、賃金のより高いアルバイトをすることができ、各種の奨学金を得るチャンスも与えられ、就学生よりは少し改善された生活を送ることが可能だからである。また、学校での学習時間は就学生より長い、在学期間が就学生の倍以上になり、大学卒業後は進学しなくてもいいという精神的な落ち着きも出てくる。さらに、経済的に許されるのであれば、配偶者や子どもを呼び寄せることも可能である。むしろ、日本語能力がまだ十分とは言えない留学生は、ハンディを持ちながら日本人大学生や大学院生と同様な課題をこなしていかなければならないし、実際に奨学金を受けられる人が少なく、ほとんど仕送りなしに自分で生計を立てていかなければならない。

留学生生活は筆者自身が経験しており、熟知している世界ではあるが、彼らに関するフィールドワークを通して、その日常生活の実態を確認することができただけでなく、新華僑はこのステージから地域社会と関わってくることを改めて認識することができた。学校では同国人か日本人以外の外国人との付き合いに終始し、アルバイト先に行くとき裏方の言葉の要らない仕事、アパートに戻ればまた同国人と顔を合わせるという環境に置かれる就学生と違って、留学生は学校では日本人と共に学び、料理店などのアルバイト先では接客の仕事も任されることがある。また、地域の中国語教室などで日本人に中国語を教えたり、小中学校で地域の子どもに中国の文化を紹介したり、自分の子どもを通して地域の住民と実質的な関わりを持つようになる。こういう関わりを通して、日本の地域社会に馴染んでいき、卒業後の社会人生活を有利に運び、日本での定着に必要な土台を作っていくのである。これは新華僑の日本社会への定着過程における重要な段階（ステージ）であると言える。

3.3 苦しい生活を強いられる研修生

身近な存在である就学生や留学生と違って、常に決められた場所（社宅や職場）において、ほとんど社会の表舞台に現れない研修生（ここでは技能実習生を含む）は、普通の人にあまり知られていない存在である。新華僑である筆者自身も特別展というきっかけがなければ、彼らに接することがなかっただろう。

7月のある真夏日に、縫製業で働く（研修・実習する）研修生の職場を訪れた。ほとんど女性しかいない職場であるが、彼女たちは黙々とひたすら仕事を進め、工場ではミシンの音しか聞こえなかった。企業側に話を聞くと、日本では単純労働やいわゆる3K労働、並びに残業を好んでする若い労働力が不足するため、それをいとわない中国の研修生を積極的に受け入れている。かつて景気のいい時期は花見、ボーリング大会から社員旅行まで連れていったが、ここ数年それがほとんどできなくなったという。

数日後の日曜日に、研修生たちの住む社宅を訪問した。日本に来て初めての来客のためだろうか、彼女たちは中国から持ってきた食材を出し合って、テーブルいっぱいの料理を作ってもてなしてくれた。彼女たちは始終笑顔と笑い声を絶やすことがなかったが、話を聞きながら周りを見ていくうちに、筆者の胸に重く迫るものがあった。

2DKに同居する4人中、2人がすでに結婚しており、うちの1人は小さい子どもを持つ母親である。日本滞在中は一時帰国が基本的に認められず、社宅に置いてある電話は受けることができるものの、自分からかけられない状況の中で、恋人や夫、子どもと離れ離れになる3年間（研修・実習期間は合せて最長3年間）をどのように耐えていくのだろうか。その上、日本語は片言しか理解できず、テレビを見てもほとんど分からないという余暇の制約もあり、残業を喜ぶ彼女たちの気持ちがよく分かる。楽しみと言えば、休みの日に先輩から借りてきた中国語のビデオ（ドラマ）を見ることと、たまにある研修生同士の行き来である。夢はと聞くと、日本ででの経験を生かして中国でステップアップしたいとか、帰国後たまった金で自分の店を持ちたいという。そのために、日本では米より小麦粉が安いからといって、中国にいる時よりも頻繁に蒸しパンを作って食べるなど、節約に徹している。食堂兼リビングルームには扉をガムテープでとめてある冷蔵庫が2つ置いてあり、部屋に入ったときから奇妙に思っていたので、それを開けて中を見せてもらった。すると、そこには、テープでとめないと閉まらないぐらい大量の真空パックの食品がぎっしりと詰まっていた。いうまでもなく、すべて中国から持ってきたものである。

彼女たちはベッドの横の壁一面に張られた写真を指さしながら、自分の家族や恋人を誇らしげに紹介し始めた。しかし、声の弾みにはやはり何とも言えない寂しさを感じさせるものがあった。

研修生は来日後、受け入れ先から住まいや仕事が与えられ、「研修手当」という名目の収入は決して多くないものの（日本人労働者の3分の1程度）、生活は安定している。しかし、受けられる日本語教育の時間数が少なく、職場ではほとんど片言の日本語で間に合うので、彼らの日本語はなかなか上達しない。それゆえに、彼らの行動範囲は就学生よりも制限されており、寮と職場との往復を繰り返す毎日である。また、長くても3年後には本国に帰らなければならないので、日本で余暇を楽しんだり、ネットワークを広げたりするよりも、将来の人生に役立てられるように、できるだけ働いて確実に金を貯めようとする。この単調な日常生活に加えて、グループでの共同生活や残業の割り当てをめぐる摩擦やストレス、3年間家族に会えない寂しさに耐えなければならない。現に、訪問した4人に数ヵ月後連絡を取ってみたところ、4人の仲がすでに悪くなっており、その中の2人にしか会うことができなかった。また、後に特別展の招待券を送ったにもかかわらず、電車の乗り方が分からなくて、展示会場まで来ることができなかったとのことであった。

3.4 子どもの教育に全力を挙げる就職者

中国人留学生の大半は卒業後日本で就職して定住するようになる。そのうちの多くは人文知識・国際業務や専門技術を要する専門職に就いて、いわゆるサラリーマンになる。ある程度経験を積んだ後独立して経営者になる人も少なくない。また、絶対数は多くないが、外国人「教授」総数の約3分の1を占める大学教員も就職者の特色の一つをなす。

筆者はこれらの就職者の家庭を訪問した際に、子どもの教育への熱心さやそれに由来する焦燥感に強いインパクトを受けた。就職や起業によってある程度の経済力を手に入れた就職者は、年齢的にも子どもの教育問題が浮上してくる時期になる。彼らの子どもの教育に対する熱心さには目を見張るものがあった。

筆者は新華僑の食生活を観察・撮影するために、ある物流会社に勤めるサラリーマンの家庭を訪れた。中国人の両親に日本生まれの4歳になる子どもがいるごく普通の家庭であった。3LDKのマンションに入ってまず目に飛び込んだのは、目当ての厨房や食卓ではなく、あちこちに貼ってある中国語（漢字）学習用のポスターであった。すぐに子どもの教育が話題になった。すると、手作りの中国語の絵本が次から次へと出され、数十冊にのぼった。たまたま親族訪問に来ている祖母と母親の手によって作られたものである。日本語は日本の幼稚園や学校に行くと必ず身につくので心配はないが、中国語の読み書きはこうもしなければなかなか覚えられない、と母親は言う。中国語も習得してほしいという願いは、中国語の絵本だけでなく、家中の中国的な飾り物にも託されているような気がした。

次に訪問したのは大学教員の家庭であった。妻が日本人という国際結婚のケースであるが、玄関から入ってきたとたんに、その濃厚な中国的雰囲気圧倒された。2階建ての一軒家であるが、家中が中国の掛け軸、山水画、提灯、中国結などで飾られ、幼児のための中国語学習用の絵本や道具、VCD類があちこちに置いてある。本国の家庭でもなかなか見当たらない徹底振りである。なぜそこまでするかと話を聞くと、子どもが日本で生まれ、手違いで日本籍になってしまったが、中国の文化に感化されつつ育つように、できるだけ中国的雰囲気のある家庭環境を作りたい、そして、将来は日本人でもなく中国人でもない国際人になってほしいという。

このように、経済的・精神的なゆとりを持つようになった就職者は、身近に中華学校がないため、次世代への母国語・母国文化の教育に危機感を持ちながらも、個々の家庭で全力をあげて対応している。彼らは中国語教育の環境に対してだけでなく、日本の公立学校の教育をも物足りなく感じており、子どもを中国の学校に送るか、或いは日本の私立学校に通わせるケースも増えつつある。

3.5 顕在化しつつあるコミュニティー

新華僑は現段階において、目に見えるような地域的コミュニティーを形成するまでに

至っていない。その要因としては、新華僑の歴史がまだ浅く、老華僑のようにある居留地に制限される経緯もなく、また中国帰国者のように自治体による住宅の斡旋を受けることもないということが挙げられる。新華僑は東京や大阪などの都市圏に集中しているが、埼玉県川口市芝園町（芝園団地）や東京都豊島区（池袋駅周辺）のような小規模の集住化現象を除き、現在のところ、大きな集住地域は形成されていない。また、新華僑の運営による中華学校もなく、共通の宗教活動もなされていないのが現状である。

しかし、一見まとまりのない新華僑でも、近年さまざまな組織や団体の結成が目立つようになった。老華僑の組織には地域社会に根ざした包括的な組織や地縁（同郷）団体が多いのに対して、新華僑は専門・研究組織や学縁組織が多数を占める。つまり、高度な専門知識を持つエリートグループがその根幹を成すということである。また、新華僑の組織は老華僑のような自分たちが集う空間としての「会館」を所有しておらず、一般の生活者までには浸透していないのが特徴である。にもかかわらず、新華僑が目覚ましい組織化の動きは、増大しつつあるコミュニティーとしての自覚と成長を物語っている。また、中国語の新聞や雑誌などエスニック・メディアの急増もコミュニティー顕在化の一因となっている。

一方、エリートたちの組織化という顕在的な動きと対照的に、一般の生活者は同じ出自（出身国や出身地）、同じ言葉（中国語の共通語や方言）、同じ食の好み（中国料理など）、類似した価値観などの同一性に基づいて、個人的なネットワークや活動を展開している。そこには潜在的でありながらも強固なつながりを持つコミュニティーが形成されている。そして、それが町の所々に増えつつある中国料理店や中国物産店、中国語のインターネットカフェなどによって顕在化しつつあるのも事実である。

4 展示の構成と方法

フィールドワークを終えて、今度は収集してきた資料を如何に限られた展示スペースで、その資料の持つ意味が伝わるように展示するかが課題になる。つまり、収集してきた資料を用いて、展示の構想を展示の構成として具体化しなければならないのである。そこで、まず個々の資料をそれぞれ就学生、留学生、研修生、就職者というカテゴリーに分類し、できるだけ来日から定着までのプロセスがわかるように順番を考えて並べた。また、エスニック性を強く反映するエスニック組織、子どもの教育、食生活、および社会への適応や住民との交流については、それぞれ独立したコーナーを設け、来館者の注目を引くよう努めた。

それぞれのコーナーの表現ポイントは、上述の調査から得た認識に基づいて形成されている。例えば、3セットの布団が敷いてある就学生の部屋や学習用品・日用品を写した写真、中国から持ってきた圧力鍋（実物の借用は日常生活に支障をきたすため、同じ

く中国から持ってきた調理鍋に差し換えた)、余暇の時間がほとんど見当たらない「一週間のスケジュール」などによって、就学生の厳しい生活を表す。そして生活にある程度の落ち着きを見せる留学生に関しては、通学用のかばんに入っているもの、アルバイトの風景や地元の小学校で母国を紹介するところを写した写真などを展示し、彼らの勉学生活とそれを支えるアルバイトの日々、および地域社会とのかかわりに表現ポイントを置く。また、一般の人にほとんど知られていない研修生については、彼らの研修・実習内容や節約的な共同生活の表現に力を入れ、実際に彼らの手によって作られた洋服や仕事上のマニュアル、および大量の真空パックの食品がぎっしりと詰まっている冷蔵庫や共同生活の風景を写した写真、ビデオなどを用いて展示した。就職者の場合は既婚者が多く、子どももいるため、彼らの仕事内容とともに、家庭生活や子どもの教育にスポットを当てた。中でも、現在大学教員になった人の留学時代の苦労話を収録したビデオや、書き上げた博士学位論文を展示することによって、成功の裏に隠されている苦労やそれまでのプロセスが来館者に感じられるように心がけた。

「社会への適応・住民との交流」というコーナーでは、主に写真やパンフレットを用いて、新華僑来日後の日本語学習、和服の試着、茶道の見学、地元の祭りへの積極的な参与などを表現した。中でも、特に阪神大震災をきっかけに結成された「東方文化芸術団」のボランティア的な活動を紹介した。

新華僑のエスニック組織や成功者、子どもへの教育、食生活については、老華僑や中国帰国者と共同のコーナーを設けているが、そこではそれぞれの特徴がおのずから現れている。例えば、新華僑のエスニック組織は専門・研究組織や学縁組織が多く、学者の著書も多数ある。子どもの教育には中国から持ってきた絵本や教科書が多く使われる。また、新華僑の家庭料理には中国の食材を多く使用するが、出身地域によってメニューや味が違う。

このように、新華僑の各グループや各側面の特徴を表現するのにポイントが置かれているが、必要以上に強調せず、生活全体を見渡せるようにも工夫した。さらに、来館者に実感をもたらすために、新華僑の日常的な憩いの場として、リビングルームを再現し、展示を立体的なものにした。それは実生活の空間の再現というよりも、定着しつつある新華僑の生活世界を凝縮した、仮構の空間の演出とも言うべきものだろう。

5 展示の成果と問題点

新華僑の生活に関する展示は国内外においても恐らく初めての試みである。このコーナーの担当者としては、展示をほぼ構想通りに実現したと思われるが、表現のポイントになる新華僑の多様性と来日から定着までのプロセス、および彼らが直面している問題や共生への問題意識が来館者に伝わったかどうか気がなるところである。

まず、展示中に回収されたアンケートに書かれている「在日中国系」についてのコメントを見ると、「特に2階の在日中国系の展示で、様々なカテゴリーの『在日中国人』の生活をコミカルに写真で表現していたのが面白かった。」「周りにいる留学生などが生活面でかなり苦労していることがよく分かり感心した（2階在日中国系コーナー）」とあり、在日中国人の多様性や日本に定着するまでの苦労が来館者に認識されたように思われる。また、来館者の多くからは、「在日中国系」に興味を持ち、この展示で親しみが強くなったとの回答が得られ、展示全体に関しては、「共生という事をどのように考えるべきか、問題提起してくれた」というコメントが寄せられ、展示の目的はほぼ達成できたのではないかと思われる。

一方、このコーナーの当事者である新華僑の来館者から寄せられたコメントを見ると、予期しなかった展示効果もあったことが認められる。以下に引用するコメントは日本に留学後大学教員として就職した新華僑から寄せられたものである。

私はこの展示を見て、来日して以来今までになかった感銘を受け、日本社会に対しても新たな認識を得ました。私は日本に来て17年ですが、今までほとんど一人で日本の社会と向き合ってきて、華僑華人社会との交流は非常に限られたものでした。私にとっては、日本は日本人によって構成された社会であり、自分はいくまでも日本にやってきた中国人の一個人として、個人的にこの社会と付き合いがなければならぬと思っていました。また、社会からは日本社会のルールや慣習を受け入れ、周囲と調和のとれた同一性を確立するように要求されてきました。それに従っていくうちに、華僑華人としての同一性を見失い、常に一種の孤独感を味わわざるを得ませんでした。自分のすぐそばに成長しつつある華僑華人社会が存在しているとも知らずに。

この展示を見て、同じ時代に、こんなにも多くの人が自分と同様に類似した経験や心の歩みを経験したかと気づかされ、自分もその42万（2002年現在中国籍の外国人登録者数一筆者注）分の1であるという新たな帰属感が生まれました。展示されている資料や実物の中から滞り十数年の多くの断片を見つけることができ、過去の自分に出会えたことに喜びを感じ、また新たな共感を獲得したことに安らぎを覚えました。

展示という虚構的な空間において華僑華人社会が現実として再現されているということは、日本社会がこの現実に対してある程度承認・受容したことを意味しています。展示主催者のすばらしい仕事があったからこそ、こういう多民族化しつつある日本をみんなの前に呈示することができたと思います。これからも寛容性のある『多民族日本』の到来を心より願っています。

（筆者記）

このようなコメントからは、この展示が図らずも、在日外国人に連帯意識や希望を与える役割を果たしたことがうかがえる。このことは老華僑の子弟と思われる高校生のコメントからも裏付けられている。

私も4分の1中国の血が体に流れていて、つい最近まで神戸中華同文学校に通っていました。高校から普通の高校に入学し、いやな思いもしたことがありますが、自分と同じ立場の人

がたくさんいることをこの展示から学び、勇気が出ました。

その他、「このコーナーでは、新華僑の主流を構成する各グループの人たちの生活ぶりや苦勞がほぼ的確に展示されており、彼らの来日から定着までのプロセスがおのずと伝わってきた。」「展示に現実味をもたらした『居間の再現』がとてもよかった。」といったような肯定的な評価が多かった。問題点としては、限られた展示スペースに多くのモノが展示されているが、それぞれのモノの持つ意味が来館者に理解されているかどうかという疑問の声や、登場人物の表層的なことは展示できたとしても内面の世界を展示という手段で表現するには限界があるという指摘もあった。また、展示会場にはゆっくりと話し合える（交流できる）場が設けられておらず、来館者が参与できるような参加型の展示ではないという意味では、従来の博物館の展示の限界を超えることができなかったという指摘や、「多民族日本」というテーマの展示は一回限りの特別展ではなく、それを日常化・民間化する必要があるという声もあった。

新華僑コーナーの展示構想から展示物の配置まで携わった担当者として、反省すべき点がいくつかあった。

- (1) 新華僑の主流を構成するいくつかのグループを取り上げたが、登場人物はいずれも都市部に居住しており、農村部に生活する中国人花嫁や研修生をも展示対象にすることができなかった。
- (2) 新華僑は祖国とのつながりが強く、価値観はもとより、家の飾りから食生活に至るまで中国的な要素が色濃く維持され、また節約のためにも中国のものを多く使用する一面を強調した結果、日本的な要素も多く取り入れた一面が見えなくなった可能性は否定できない。
- (3) キャプションが簡単すぎて、個々の展示物の持つ意味が伝わらなかったものもある。加えて、展示物を解説する専門の解説員を配置しないという博物館の運営制度にも問題があるのではないかと思われる。
- (4) 登場人物の内面の世界をいかに展示するかは今後も検討を要する点である。今回は一部の登場人物へのインタビューを収録したビデオも流していたが、モニターは離れた場所に制限されて置かれているため、展示されている人物との関連が連想されにくく、効果が薄くなったのではないかと思われる。

なお、今回の展示物は担当者が撮影した写真やビデオ以外は、すべて当事者から借用したものであるが、借用されたら日常生活に支障をきたすものやプライベートなことに深くかかわるものは借用・展示できなかったのもこの展示に限界をもたらした一因である。

6 展示を通して見えた新華僑の諸問題

この展示はマイノリティの人びととの共生を考えるきっかけを来館者に与えただけでなく、展示に直接関わった筆者にも、当事者として新華僑の直面している問題を再認識し、それを解決する方法を考える機会を付与してくれた。

前章で引用した新華僑のコメントからも分かるように、多くの新華僑は日本社会に認められるために、一方的に定められた社会ルールや規範に無条件的に従わざるをえない。そのために、自分らしく生きることができなくなり、アイデンティティも曖昧になり、どっちつかずの孤独感が常に随伴する。この心の歪みはマイノリティの外国人に同化を強要するホスト社会に起因するのではなからうか。それを放置すると、いずれ社会全体の歪みになりかねない。社会安定のためにも、マイジョリティアの人びととマイノリティの人びとが相互に理解・尊重し平等に生きられる共生社会を創出しなければならない。

また、就学生や留学生への取材を通して、彼らの抱えている問題が浮き彫りになった。日本と中国との物価の違いや収入の格差が大きいため、日本での勉強や生活に必要な資金を中国の親の仕送りでまかなえる人はごく少数の富裕層に限られ（ちなみに、中国の富裕層の子どもは英語圏の国に留学する傾向がある）、ほとんどの人は仕送りなしにアルバイトの収入だけでまかなわなければならない。彼らは低賃金・長時間の労働を強いられているだけでなく、日本社会からはしばしば否定的な目で見られるという過酷な境遇に置かれているのである。それに耐えられない人は社会的問題を引き起こしかねないので、受け入れ制度やサポート体制の見直し、企業や地域住民の意識変革が必要である。

それに加えて、研修生の問題も見過ごせない。展示では様々な制限があり、彼らの生活の一側面しか表現できなかったが、「研修生」というのはほとんど名ばかりで、彼らは実質的労働者である。しかし、劣悪な労働環境で働かされながら、低額の「研修手当」しか受けられず、各種の労働保護法や労災保険法の適用もなく、受け入れ企業によっては、外出の制限や寮内における監視カメラの設置など人権を侵害されることもある。その上、日本語習得の不足や共同生活による過大なストレス、何年も家族に会えず電話さえも自由に使えないなど、苦しい生活を強いられている。研修生は地域社会に生活する「人間」ではなく、使い捨ての廉価な働くモノとして扱われているのが現状である。しかし、労働力不足の日本社会が今後も彼らを必要としているため、彼らは一時的な存在ではなく、地域社会の一員として存在感を増していくだろう。彼らの労働・生活環境が改善されなければ、いずれは大きな社会問題として顕在化すると思われる。

もう一つの問題は新華僑の子どもの母語学習の問題である。集住地域がほとんど形成されず分散的に居住している新華僑は、次世代への母語・母文化教育が個々の家庭に委

ねられているのが現状である。しかし、子どもの母語教育・学習の問題は決してエスニック・コミュニティ自身の問題だけではなく、外国人の子どもを含む次世代に未来を託す日本社会全体の問題でもある。というのは、母語学習は子どもの自己形成に関わる重要な一因であり、共生社会を創出するための人材育成にも欠かせないからである。特に後者は今回の展示のためのフィールドワークで、とよなか国際交流協会運営の「子どもメイト」²⁾で実践されている母語学習の活動への取材を通して得た認識である。

子どもは言語習得能力が高く、来日時の年齢にもよるが、多くは日本人の子どもとほぼ同じ程度の日本語力を身につける。しかし、学校やボランティアによる日本語教育はしばしば日本社会への適応のためのものであり、ほとんど母語を介さないため、母語能力の低下がその代価とされる。母語学習・維持の環境に恵まれていない中、子どもたちは次第に母語を忘れ、親とのコミュニケーションもおろそかになる。母語を取り戻し伸ばしていくことは、母文化の理解やアイデンティティの確立、親子のコミュニケーションの確保に重要な役割を果たし、また、家族と地域住民をつなげるにも役立てることが出来る。このことは展示でも取り上げた子どもの発言や作文からも読み取れるのである。

(母語とは、)自分を象徴・表現する言葉。自分の象徴。(母語学習者C(「子どもメイト」2005:57))

読み書きや話すのは忘れていたけど、聞くことはできた。先生たちの間のやりとりも大体聞き取れたし、まだ耳には残ってたんだってわかって嬉しかった。日本にどれだけ長くいても、やっぱり私は中国人なんだと再確認できた。(中略)中国語はまだまだだけど、中国人として物事を考えられるようになってきたのは確か。自分は中国人だということを誇りに思いたいから、もっと中国語を話せるようになりたいと思う。(母語学習者S(「子どもメイト」2005:63))

親とは言葉は通じるけど、たまに考え方で違って来る。そんなんいっぱいあるから気にしてへんけど。(中略)親の考え方は古いなと思うけど、そういうことは日本でもあるから、普通のことやけど。何て言うんやろ、親の中国文化は(自分にとっては)普通。違和感ない。日本の文化も違和感ない。切り替えできていると思う。自分的には結構バランスはいいと思う。(母語学習者B(「子どもメイト」2005:59))

このように、母語の習得は子どもの自尊心や自信、アイデンティティの形成に重要な役割を果たしており、また、日本語・日本文化の浸透と母語・母文化の学習・実践を通じて、二つの言語に象徴される複数の文化がまさに子どもたちの中に、時には葛藤しつつもバランスが取れるように共生しているのである。共生を実践してきた彼らこそ、共生社会への道を開く大きな力になるだろう。日本社会の未来のためにも、マイノリティの子どもたちの母語・母文化学習の権利を保障する社会制度や社会理念の確立が不可欠

である。

注

- 1) 新華僑という用語は一般的に、1970年代末中国の改革開放以降に来日し、定住している（段・江・山下 2005：132）、或いは定住傾向の強い中国人（莫 1993）を指すが、本稿では、展示時と同様に、中国の改革開放以降に来日した中国出身の人（中国帰国者やその家族を除く）を意味し、就学生や留学生、研修生など定住していない人も含め、新来中国人の同義語として用いる。
- 2) 「子どもメイト」は現在「トワイライト」と名称を変え、活動を続けている。

文 献

石田法子

1990 「不法就労と人権侵害」行財政総合研究所編『外国人労働者の人権』東京：大月書店，23-32頁。

太田晴雄

2000 『ニューカマーの子どもと日本の学校』東京：国際書院。

岡 益巳・深田博己

1995 『中国留学生と日本』東京：白帝社。

「子どもメイト」編

2005 『母語学習と人材育成』財団法人とよなか国際交流協会。

朱 慧玲

2003 『日本華僑華人社会の変遷』東京：日本僑報社。

段 躍中・江 衛・山下清海

2005 「変容する日本の華人社会」山下清海編『華人社会がわかる本』東京：明石書店，132-151頁。

陳 於華

2004 「増大する新来中国人のコミュニティ」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，86-88頁。

陳 天璽

2003 「中国人—日本社会と新華僑」駒井洋編『多文化社会への道』東京：明石書店，231-260頁。

佟 岩・浅野慎一

2001a 「縫製業の中国人技能実習生・研修生における日本語習得と社会諸関係に関する実証研究(1)」『神戸大学発達科学部研究紀要』8(2)：183-209。

2001b 「縫製業の中国人技能実習生・研修生における日本語習得と社会諸関係に関する実証研究(2)」『神戸大学発達科学部研究紀要』9(1)：167-196。

莫 邦富

1993 『新華僑』東京：河出書房新社。

法務省入国管理局編

各年版『在留外国人統計』 法務省入国管理局。

宮島 喬

1993 『外国人労働者と日本社会』 東京：明石書店。

2003 『共に生きられる日本へ』 東京：有斐閣選書。

廖 赤陽

2003 「在日中国人の社会組織とそのネットワーク」『日本における華僑華人研究』 東京：風響社，
277-296頁。